ブラッドベリの主題による変奏曲

〈主題〉

ひとときはオハイオ州の冬だった。ドアはとざされ、窓には錠がおり、窓ガラスは霜に蝕り、どの屋根もつらに縁どられ、斜面でスキーをする子供たちや、毛布にくるまって大きな黒い熊のように凍った街を行き来する主婦たち。

それから、暖かさの大波が田舎町を横切った。熱い空気の大津波。まるで誰かがパン焼き窯の戸をあけっぱなしにしたようだった。別荘と灌木の茂みと子供たちのあいだで、熱気が脈を打った。つららは落ち、こなごなに砕け、溶け始めた。ドアが勢いよくひらいた。窓が勢いよく押しあげられた。子供たちは毛織の服をぬいだ。主婦たちは熊の仮装をぬぎすてた。雪がとけ、去年の夏の古い緑の芝生があらわになった。

ロケットの夏。そのことばが、風通しのよくなった家に住む人々の口から口へ伝わった。ロケットの夏。あたたかい砂漠の空気が、窓ガラスの霜の模様を変化させ、芸術作品を消した。スキーや橇が俄かに無用のものとなった。冷たい空から町に降りつづいた雪は、地面に触れる前に、熱い雨に変質した。

ロケットの夏。人々は、しずくの落ちるポーチから身を乗り出して、赤らんでゆく空を見守った。

ロケットは、ピンク色の炎の雲と釜の熱気を噴出しながら、発信基地に横たわっていた。寒い冬の朝、その力強い排気で夏をつくりだしながら、ロケットは立っていた。ロケットが気候を決定し、ほんの一瞬、夏がこの地上を覆った。……

『火星年代記』より『一九九九年一月ロケットの夏』
（小笠原豊樹訳／ハヤカワ文庫版）

〈第一変奏〉

オハイオ州の冬のことである。閉ざされたドアと、錠の下りた窓と、霜に蝕った窓ガラスと、氷柱に縁取られた屋根が、州の住居の随所に散見され、そこに住む子供たちはしばしば斜面でスキーをし、主婦たちは毛皮のコートを着て寒い街を行き来したりしている。

ある時、暖かい気流がオハイオ州を横切った。オハイ

オ州全体がその気流に巻き込まれた。住居の氷柱(つらら)は落ちて砕け、溶け始めた。ドアは気流によって開き、窓は押し上げられた。子供達は毛織の服を脱ぎ、主婦達は毛皮のコートを脱いだ。雪が溶けて、芝生が露になった。

暖かい空気が、窓ガラスの霜を溶かした。スキーや橇は無用になった。雪は、地面に落ちる前に溶けた。

オハイオ州の人々は、ポーチから、夕方の西の空を眺めた。

ロケットが発信基地に敷設されており、それは炎と熱気を噴出していた。前述の気流は、ロケットの排気であった。

〈第二変奏〉

ひとときがオハイオ州の冬である時、ドアはとざされ、錠がおり、窓ガラスは曇り、屋根はとられ、子供たちと大きな黒い熊が街を行き来する。

大津波の大波が田舎町を横切った。誰かがパン焼き窯をぱなしにした。子供たちの茂みのあいだで打った。つららは落ち、砕け、始めた。ドアがひらいた。窓があげられた。子供たちはぬいだ。熊はぬぎすてた。雪がとけ、去年の夏の古い緑の芝生になった。

ロケットが夏である時、人々は落ちるポーチから乗り出して赤らんだ。そして守った。

ピンク色の雲と釜が噴出しながら、横たわっていた。冬の朝が夏をつくりだしながら立っていた。ロケットが決定した一瞬、夏が覆った……

〈第三変奏〉

きつつきはおはようの冬だった。ドアはささくれ、窓にはジョーがおり、旅ガラスは霜に埋まり、どの種もクララに縁切られ、仮面でキスする子供たちや、毛蟹にくるまって大きな黒い蜘蛛のように凍った街を行き来するシェフたち。

それから、マッカーサーの狼が、田舎町を裏切った。熱い吸気の大乃国。丸出ダメオがパン焼き窯のことをバカッぱなしにしたようだった。奇形児と下僕の僻(ひが)みと子供たちの愛さえ、メッキが逆を塗った。クララは落ち、こなごなにクラッカー、湿け始めた。ドラが勢いよく響

いた。サドが勢いよく押し荒れた。子供たちはプールの柵を抜いた。シェフたちは蜘蛛のソテーを吐き捨てた。月がとけ、去年のカツの古い縁のかびがあらわになった。

ソケットの松。そのことばが、ハゲ僧師の濃くなった故に住む人々の口から口へ伝わった。ソケットの松。あたたかい鯖食うの食う気が、旅ガラスの下の模様を硬化させ、閨室作品を出した。茎や森が膠の芙蓉の園となった。冷たい虎から鯱に譲り続いた勇気は、事件に触れる前に、熱い鮫に変質した。

ソケットの松。人々は、しずくの落ちるポチから耳を剃り出して、ああ絡んでゆく虎を見守った。

ソケットはピンク色のお脳の蜘蛛とタマの脚気を粉飾しながら、売春窟に横たわっていた。寒い冬にアーサー、その力強いファイトでカツをつくりだしながら、ソケットは立っていた。ソケットが輝光を決定し、ほんの一瞬、松葉五の二乗を折った。

〈第四変奏〉

ひとときはオハイオ州の夏だった。ドアは開け放たれ、窓の錠は外され、窓ガラスは灼熱の陽光を反射し、どの屋根も陽炎を身にまとい、湖畔で肌を焼く若者達や、肩や胸を必要以上に露出し、熱にうかされた犬のように燃える街を行き来する主婦達。

それから、烈火の大波が田舎町を横切った。熱い、さらに熱い空気の大津波。まるで一グロスのパン焼き窯を一斉に開け放ったかのようだった。別荘と灌木の茂みと子供達の間で、熱気が踊り狂った。屋根は落ち、粉々に砕け、溶け始めた。ドアが勢いよく火を噴いた。窓がどろどろと液化し、庭の草を焦がした。子供達は燃え上がるウールシャツの中で、灰になった。主婦達の露出した肌から、肉を焼く音がした。門柱が溶け、緑の芝生が焦げ色に変わった。

夏のロケット。その言葉が、風通しのよくなった街を後に訪れた人々の口から口へ伝わった。夏のロケット。燃えさかるマグマの熱塊が、窓ガラスを昇華させ、芸術作品を焼き払った。スキーや橇がひとかけらの炭になった。熱気を孕んだ空から町に降り続いた雨は、地面に触れる前に、熱い蒸気に変質した。

夏のロケット。人々は、燃え落ちたポーチから身を乗

り出して、朱に染まった空を見守った。

ロケットは、ピンク色の炎の雲と釜の熱気を噴出しながら、発信基地に横たわっていた。暑い夏の朝、その力強い排気で熱帯を作り出しながら、ロケットは立っていた。ロケットが州の住民を死滅させ、ほんの一瞬、死者の呪詛がこの地上を覆った。

〈第五変奏〉

その年のオハイオ州の冬は厳しかった。ドアは閉ざされ、窓には錠が下り、子供達は斜面でスキーをすることもなく、主婦達が街を行き来することもなかった。

それから、二度目の寒波が田舎町を横切った。凍った空気の大津波。まるで誰かが、フリーザーの扉を開けっ放しにしたようだった。別荘と灌木の茂みの間で、寒気がとぐろを巻いた。氷柱は長く伸び、庭咲きの根雪と繋がった。ドアが固く凍りついて開かなくなった。窓が幾層にも重なった氷の底になった。子供たちは三枚の毛織を着込み、主婦達は極地の動物の仮装に身を包んだ。雪が山を築き、去年の夏の古い緑の芝生は10フィートの地底に沈んだ。

ロケットがあれば。その言葉が、凍てついた家に住む人々の口から口へ伝わった。ロケットがあれば、きっと暖かい砂漠の空気が、窓ガラスの霜を溶かしてくれるだろう。スキーや橇で、また遊ぶことができるだろう。冷たい空から町に降り続く雪が、雨にかわるかも知れない。

ロケットがあれば。人々は、雪に埋もれたポーチから身を乗り出して、灰色に沈む空を見守った。

発信基地は、純白の衣装をまとった優雅な廃墟に変わっていた。寒い冬の朝、その力強い排気で夏を作り出すはずのロケットだけが、そこにはなかった。

〈第六変奏〉

アンダスン夫妻の別荘（コテイジ）は、セントパルクヒルの太平洋を見降ろす北の斜面にあった。

夫妻は、シドニーから車で小一時間程度のこの場所に、庭のコスモスが咲き始める三月初めまで滞在する。

故郷のオハイオで、ホワイトクリスマスを祝った後、まだ幼い孫達の枕元にプレゼントを置き、その足ですぐ

さま真夏の南半球へ飛び、この別荘で新年を迎えるのが、ここ数年の夫妻の行事になっている。時差ぼけならぬ季節ぼけが、しばらくの間は生活のリズムを狂わせるが、やがてはこの爽やかな気候に、身体の方から順応してゆく。夫妻は老後の冬を、毎年このように過ごせることを無上の幸せと考えている。

九か月ぶりに取り外されるピアノカヴァー。リヴィングルームに、婦人の得意なロベルト・シューマンの『クライスレリアーナ』が流れる。開け放たれた窓は、夏の光の粒を含んだ空気を取り込み、婦人の指が紡ぎ出す和音を庭先にばら撒く。アンダスン氏のパイプが、青い煙をたなびかせる。しもやけの手が、夏の酸素を呼吸するパイプを抱いて赤らんでいる。

やがて蒼い月が斜面から登り、夏の星座の中に、雄々とその位置を占める。

夫婦のヴァケイションは、オハイオの冬とセントパルクヒルを結んだ線上に昇る穏やかな天体だ。天体は表情を変えず、いとおしむように下界を見降ろしている。

蒼い月が、セントパルクの丘を見降ろすのと同じ眼差しで……

〈第七変奏〉

退屈なマーマレードは、透明なガラス瓶の内側にもたれたまま、長い午睡（シエスタ）の続きを楽しんでいた。彼は隣のブルーベリージャムのようには、頻繁に外気に触れさせてもらうことがないが、棚の奥底に閉じ込められたピッツァスプレッドに比べれば、自分の方がほんの少しだけ幸せなのだと夢うつつに考えている。

テーブルの皿の上では、食べ残しのバケットが硬い木片に変わっている。ジャスミンティの香ばしいフレーヴァーは、午前十時二十分前後に、ダイニングキッチンの隅々まで拡散し、そこにある全てのものの表面に吸収された。ペッパーソースのしみは、テーブルクロスの一方の対角線に沿って三つあり、それらはにじんで中心から離れるほど色が薄い。

仲良く並んだマヨネーズソースと、オイル＆ビネガーのドレッシングは、乳化することの意義と必然性についての議論に余念がない。しまい忘れられたバターは、バターケースの中で溶けてしまうことに対する恥じらいを

ひた隠しながら、プライドを守ることの尊さを噛みしめている。

一方、冷蔵庫に格納された野菜には、快適さと引き換えに「死と変容に関する観念的考察」という難題が課せられていた。例えばキャベツは調味した挽き肉を包んで煮込まれ、トマトは湯剝(ゆむ)きされた後刻まれてソースの中へ、レタスは千切りにされてオードヴルの付け合わせにと、その各々の末路について考える時、常に彼らが直面するのは野菜というものの完了しない生命のしたたかさであり、それはしばしば「不確実な死」に対するより深い認識に彼らを導く啓示となるものであった。

それぞれの思惑をよそに、キッチンには確実な闇が訪れる。

そしてこれもまた確実な疾風の到来は、いつも通り、午後七時四十五分であった。

マーマレードは、半覚醒の状態で気圧の変化を察知した。アコーディオンカーテンは、乱れた気流を静かに諌めたが、それはガスコンロの暴挙の前ではあまりに無力だった。二基のコンロが一斉に火を吹き、青い光をキッチンに撒き散らしたのだ。

淀みきった空間にとって、それはまどろみや議論や思考というものを根底から覆(くつがえ)し、混迷という単一の次元にまとめ上げてしまう巨大なエナジーであった。

平安なキッチンに、人の手が下ったのだ。

〈第八変奏〉

あの頃、私が借りていた部屋は、そう、夏は西陽がよく差し込む狭苦しい三畳間でした。

立て付けが悪いものですから、窓などは一度開けると閉めるのにひと苦労。面倒なんで開けっ放しにすると、蚊が入り込んで寝ていると刺されてかゆいことかゆいこと。今じゃ、よくあんな所に三年半も寝起きできてきたと思います。

窓の下から外を見降ろすと、そこはちょうど長い長い坂道の途中でして、ええ、そうです、まだ舗装されておりませんでした。人が歩くたびにほこりが立つような道でした。読書に疲れると、窓枠にこう肘を乗せまして、よく外を眺めておりましたねえ。坂道ですから、登る人と下る人とでは、歩き方が違う。登る人は少し、前屈み

になりましてね。下る人は逆に胸を張っている。そんなことを考えていても、結構暇つぶしにはなったものです。

その坂道を、夏になりますと、風鈴屋さんが通りましてね。こう、大きな屋台に風鈴を五十か六十個から吊り下げて通りますから、その音と言ったら、大変なものでした。蝉時雨も驚いて鳴りをひそめる始末でしてね。

遠くからその音がすると、窓から身を乗り出して、近付くのを待っておったものです。風鈴屋の親父さんも、私の姿に気付くと、窓の下で屋台を停めて「暑いなあ」と大声で言って汗を拭う。商売っけがないというか、決して風鈴買わんかねとは、言わないんですね。だから私も強いて買い求めたことはありませんでしたがね。赤、黄、青、緑とその時私の窓の下は、一斉に花が咲いたようでした。

さあてところが、私がそこにおった最後の夏でしたか。その夏は待てども待てども、例の風鈴屋が外を通らない。こりゃ何かあったなと、早速人に尋ねてみますとね。あの親父は実はとんでもねえ悪者だと言う。風鈴に何か、その悪い薬を、大麻だかヒロポンだか忘れましたがね、それを詰めて売り歩く売人だったと言うんですね。もちろん、普通の種も仕掛けもない風鈴も、売ってはいたんですが、あの中にはそういう、つまり鳴らない風鈴も交じっていたんだと言う。

何だか、がっかりしたような、変な気持ちになったのを覚えております。夏になると、今でも思い出しますねえ。あのたくさんの風鈴が一度に鳴り出す音をね。それから、こんな諺も。「人を見たら泥棒と思え」ってね。

〈第九変奏〉

頻闇に、百目蠟燭が揺れている。

小さな火影だけが、風向きを知っている。そして流れ落ちる蠟だけが、闇の濃さと、それを切り裂く光と熱の際疾さを知っている。

燐光を撥ね返す何物も無く、その熱を奪い取る何者も無い闇の底に、百目蠟燭が揺れている。……

〈第十変奏〉

ピアノマンの憂鬱は、今や極限に達していた。

彼が来たる演奏会用に編曲した四声のカノンは、実に彼の十本の指では演奏不能だったのだ。自筆の楽譜を睨みつけたまま、ピアノマンは喘いでいた。ミシガン湖を見降ろす、彼の練習場を兼ねたマンションの一室である。

部屋のほとんどを占領したスタインヴェイは主人の懊悩など意に介せず澄まし顔で佇んでいる。調律師のボブはピアノという貴婦人に仕える下僕よろしく、慇懃にその陰に控えている。

「ええい、いまいましい、このハンマークラヴィールピアノフォルテのうすのろめ!」

ピアノマンは怒り心頭に発して（だがやはり演奏家の最低のマナーとして、鍵盤を叩きつけたりはせず）EとGのトリルを執拗に鳴らし続けた。

「やはりこいつは怪物だ。そもそもこいつのせいで音楽は堕落したのだ。精神の自由な解放たるべきムジークを、十本の指の檻の中に閉じこめた悪魔だ。だがしかし、その悪魔を自在に操ろうとする私はいったい何者だろう。ああ、私は檻の中の哀れな人形使いか!」

ピアノマンは完全主義者であった。ただ、閃きに欠けるきらいがあるようだった。

「先生、いっそ、連弾用にアレンジし直したらいかがです?」

ボブの一言に、ピアノマンはぱっくり口を開け、十秒間保持した後、今度はやおらそれをバナナの形にした。

ピアノマンは笑ったのだ。

「ボブ、君ってやつは。……君はジュリアードで何を専攻した?」

「はあ、オルガンとクラヴサンを少々……」

「申し分ない。ちょっと弾いてくれ。さ、さ、さ、弾いてくれ弾いてくれ」

ボブはいつもの立場を離れ、無言の貴婦人に相対した。この若い調律師は、非常に良い耳を持っていたが、ずば抜けた腕には恵まれなかった。だが日頃扱い慣れた貴婦人をからかう程度のことは、お手のものだった。

「いいぞボブ。私は楽しい気分になってきた。さあ、編曲のし直しだ。今度のステージは凄いぞ。シカゴ中の評論家をあっと言わせてやるぞ。ははは、鍵盤を十二色に塗ってしまえ。ステージに噴水を設けて、レーザー光線で音と光の饗宴と洒落込もうじゃないか。ははは、ついでにロケットの一台も打ち上げるか。ははははは」

ピアノマンは単純な男であった。

〈第十一変奏〉

流れ星がキラキラ
海の向こうに落ちる夜は
眠れない私を浜辺に誘って
夢の中をユラユラ
あなたの腕に抱かれながら
今度は忘れず願い事をするわ
Shy Shy Shinin　今夜は
Shy Shy Shinin　あなたの
宇宙船に乗って
夜空をかけめぐりたい
オ・ネ・ガ・イ　Darlin!!
ステキな夢♡ください

『スペイシー・サマー』作詞　衣笠冬児
（日本音楽著作権協会許諾　８２０６０８７―３ｘｘ号）

〈第十二変奏〉

中年のくぐつ師と、助手のアコーディオン弾きの少年（きっとせむしなのだろう。彼の背中は老人のように曲がっている）とのささやかな出し物は、予定の正午を二十分程過ぎてようやく始まった。

この部落にこうした旅回りの芸人がやって来るのは、六年前のあまり冴えない奇術の一座以来のことだが、相変わらず頑迷で排他的なこの部落の住人達は、前回のマジック同様、今度の見せ物に対しても、なかなか警戒と猜疑の眼差しを解かなかった。彼らはそれほど娯楽に慣れていなかったのだ。

広場の中央に、古ぼけた林檎箱がひとつ。それがくぐつ師の設けた、唯一の舞台装置だった。

今にも一雨降らせそうな、陰気なねずみ色をした空の下である。林檎箱を遠巻きに囲んで住人達は表情を変えずに、二人の動作を窺（うかが）っている。観衆は五、六十人であろうか。

異様にくたびれた黒い皮の鞄から、くぐつ師が大事そうに取り出したのは、これもまたぼろぼろの服をまとっ

た一体の乞食の人形だった。

人形は林檎箱の上で一瞬、ぐったりと膝を折った。しかし、くぐつ師がその背後で姿勢を整えた途端、俄かにその全身に生命を漲らせた。せむしの少年のアコーディオンが、掠れた音でヴェニスの舟歌を弾き始めるのと同時だった。

住人達の眼に、ほんのわずかながら期待の光が宿った。

くぐつ師は、小柄なからだに似合わない野太い声で語り始めた。

「おい、水夫。俺を蔑んだ眼で見やがったな。この乞食め、船が汚れる。今すぐそこから落ちて、運河に溺れて死んじまえ。そう思ってるんだろう。ああ、俺は乞食だ。小汚いなり通りのしがねえお貰いよ。だがなあ、好きでこんな道に落ちぶれたわけじゃねえ。聞けよ水夫。俺の身の上話をよ。……」

少年のアコーディオンが、ゆっくりしたリズムに変わった。林檎箱のゴンドラの上で、乞食は船の揺れに合わせて、からだを上下させながら、また静かに話し始める。

広場はしんと静まり返り、観衆の眼は人形の細やかな動きに次第に引き込まれてゆくように見えた。

「俺の親父は二十年前、ヴェネツィアーの大商人だった。これは嘘じゃねえ。名前を言やあ、あんただって知ってるはずだ。その親父が、この町に城のような邸を建てた。俺が五つの時だ。家族の人数の二十倍の部屋があった。ゴンドラで邸の回りをひとめぐりするのに四十分かかった。

おめえさん、この辺長いのかい？　じゃあ噂くらいは聞いてるかも知れねいなあ。その邸がよ、ある年火事で焼けちまったのよ。夏の、ちょうどカーニヴァルの真っ最中だったな。邸じゃあ、大勢の名士を集めて、盛大に仮面舞踏会だ。そのさなかに、どこの誰だか知らねえが、おおかた金持ちを妬んだケチな野郎が、邸のどこかにこっそり付け火しやがったのよ。火は立ち所に燃え広がった。遠くからは格好の見せ物だったらしいぜ。水に炎が映えてな。夜の夜中によ。

運河に囲まれた大邸のことだ。招かれた客は逃げるに逃げられず、水に飛び込むのをためらった連中は、たちまち炎に巻かれて仮装のまま焼け死んだ。……俺の親父は顔に大火傷を負ったが、すんでの所で水に飛び込み、

命だけはなんとかつなぎ留めた。俺は客のゴンドラに紛れ込んで助かった。だがあとの家族は邸と一緒に、ものの一時間のうちに灰になっちまった。

火事が鎮まった後には、焼け落ちた邸と、不幸が残った。……親父は醜い顔になった上に、ひと財産を灰にした。誰かの付け火とは言え、火事で大勢の死人を出した責任で、最早親父は、ヴェネツィアにはいられなくなっちまった。舞踏会の仮面で顔を隠したまま、親父は俺を連れてひっそりとこの町を去って行った。それがそもそも、つまづきの始まりよ。……」

木片を麻でくるんだだけの粗末な人形は、不思議な表情を湛えて虚空を睨んだ。変わるはずのない人形の顔付きに、くぐつ師は絶妙の変化を与えていた。だが、娯楽を素直に受け入れられない観衆は、まだ胡散臭そうな視線を解こうとしない。作りごとをあくまで拒否しようとする多くの冷ややかな眼に、くぐつ師と少年は耐えなければならなかった。

「色々な商売に、親父は手を出した。だがそのことごとくが、見事なくれえに失敗した。おかしな仮面を外そうとしない変わり者の商人の話に、乗ってくる奴などいる方がおかしいってもんだ。その日暮らしが続く中で、親父はある時、ふっと売り物の木偶の坊を使って人形芝居を始めた。親父にとっちゃ、半ばやけの気まぐれでやり出したことには違いねえが、妙なことにそれが随分と評判だった。親父は、これは金儲けになると踏んだんだろう。俺にアコーディオンを習わせ、人形芝居に音楽を付けさせた。親父は自分の工夫でいくつかの人形を作り、受け売りの下世話な台本を書いた。行く先々の道端で人形芝居を催して、俺と親父はなんとかジリ貧の状態を免れたってわけよ。……」

観衆は、疑り深かった。芝居の台詞にある嘘を嘘として受け取ることなど、到底できないのだった。

アコーディオン弾きの少年の顔は、目深に被った帽子が作り出す影を割り引いても、あまりにも変化がなさ過ぎたし、ましては、その鍵盤に触れる奇妙に節くれだった指先は――六年前、奇術の一座が突然舞台に躍り出たこの部落の青年によって、奇術の種を白日の下に晒されたように、くぐつ師とその少年もまた、彼らの手によって、虚偽を暴き立てられなければならないようだった。

ひとりの若い観衆が、せむしの少年から腕ずくでア

コーディオンをむしり取ると、彼らは恐怖に凍りついた面持ちを浮かべ、出し物を中断した。

少年の顔の仮面が剥ぎ取られ、醜くただれた老人の面相がそこに現れた時、それまで黙りこくっていた観衆の間から歓喜に満ちた叫び声が、一斉に湧き起こった。

〈第十三変奏〉

大人は誰しも、その昔子供だったのだ。

階段の一段が、膝のすぐ下まで来るほどの背丈の頃。世界の縮尺は、今より数段大きく、外界は圧倒的な威容をもって少年のからだに覆い被さっていた。

階段。……私の記憶は、その階段のシーンから始まっている。

その階段は、ひとつフロアを上がる間に、踊り場を挟んで十六段のステップがあった。

私は地上の最初の段から、数を数えながらそれを登った。

小さな子供にとって、あの急な階段の傾斜というものは、それに立ち向かうのに、かなりの勇気と決断を要求するものだった。私は登っている最中、後ろを向くのを恐れた。振り返ると、そのまま頭から落ちてしまうような気がしたのだ。

階段は、太陽の光を遮断された、縦に伸びるトンネルだった。ひたすら一心に数を数え続ける私には、ある階に辿り着いても、そこが何階であるか判別できない。ただ、八十段を登り切った所に、光が満ちていることを私は知っていた。

建物は五階建てだった。階段の終点からは、垂直に梯子が伸びていた。梯子は頭上で、四角い空間に吸い込まれている。屋上へ続くそのスペースは、いつも輝くばかりの陽光に溢れていたのだ。

八十段を休みなしに登り詰めた少年は、息を弾ませて、その空間を見上げた。視野いっぱいに、明るさが弾け飛んでいた。暗さに慣れた眼には、なおさら眩しさが強烈だった。太陽の照射を、私は全身から欲した。だが、それは不可能だった。

梯子の末端は、床からかなり離れた位置で切り取られていた。私はそこに、手が届かなかったのだ。

私は指をくわえて、そこに立ち尽くすしかなかった。

首が痛くなるまで、頭上を見上げていた。
光は粒でできている。……私はそう思った。四角い空間をブラウン運動のように、ぶつかりながら飛び交う光の粒子。自分もその粒のひとつになって、飛び回ることができたら……、少年の願望はしかし、コンクリートの壁の底で阻まれていた。
大人になった私は、もう自由自在に、屋上へ上がることも、そこで日光浴することもできるだろう。
だが、光は私にとって、もはや茫漠と眼の前に垂れる巨大な幕でしかない。
光を粒だと確信した少年の眼を、私はあの階段のどこかに忘れてきてしまったのだ。……

〈第十四変奏〉

「夏子ォ、帰って来てくれ！　今どこにいるんだ。仕事してるのか、夏子。お前がいなくなってから、俺は血眼(ちまなこ)になって、心当たりのある所は全部捜したんだぞ。お前の親戚、友達、昔の職場、でもどこを訪ねても、お前の居場所はわからなかった。全然わからなかったんだよう。
夏子、俺はひどい男だ。お前が内心どんな辛い思いをしていたか、今じゃようくわかっているつもりだ。この通り、頭を下げる。もうあんなことは絶対にしない。あれは、あれはちょっとした出来心だったんだ。もう美津子とは別れた。金輪際あいつとは会わないと誓うから、だから夏子。頼む。帰って来てくれ。
ほら、篤(あつし)だ。こんなに大きくなったぞ。この春から二年生だ。このこのこの目許がお前にそっくりじゃないか。篤、かあちゃんに何か言ってやれ。え、言えないか、そうか、もう忘れちまったのか。しばらく会ってないからなあ。かあちゃんに会いたいか。そうかそうかそうか会いたいか。とうちゃんも会いたいぞ。夏子。お前、あの大事にしていたロケットの中に、篤の写真入れてたじゃないか。子供が可愛(かわい)くないか、夏子。可愛かったら、お願いだあ、帰って来てくれえ。また前みたいに、三人でお前、『わくわく動物ランド』観ようじゃないか。なあ、夏子。
おばあちゃんも心配してる。俺はお前の実家に、会わせる顔がなあい。篤も口には出さないが、学校でいじめられてるかも知れない。片親で育った子供は不良になる

ぞ。不良になっちまうよなあ、篤。

頼む。これが最後のお願いだ。電話だけでもいい。手紙でもいい。とにかく連絡してくれ。夏子。お願いだ。夏子ォォォォォォ！」

〈第十五変奏〉

天上の声はお言葉をたまわれた
したたかな審美眼を持ちなさい
美しい花は人前で咲かないものだ

天上の声はお言葉をたまわれた
しなやかな想像力を持ちなさい
もののかたちは決してひとつではない

天上の声はお言葉をたまわれた
すこやかな歌声を持ちなさい
友人を退屈させてはならない

天上の声はお言葉をたまわれた
はれやかなほほえみを持ちなさい
百人の悪漢が道を開けるだろう

天上の声はお言葉をたまわれた
かろやかな足取りを持ちなさい
七つの国にお前の存在を知らしめるために

この愛すべき地上に
降り注ぐ尊き天上の光よ
我が道行きを照らしたまえ
この不格好なプロメテウスの創造物の
幾多の苦難に満ちた長い道行きを

天上の声はお言葉をたまわれた
歩き始めなさい
私はお前のために「夏」を作ったのだ

〈主題再示及びコーダ〉

ひとときはオハイオ州の冬だった。ドアはとざされ、

窓には錠がおり、窓ガラスは霜に蝕り、どの屋根もつらに縁どられ、斜面でスキーをする子供たちや、毛布にくるまって大きな黒い熊のように凍った街を行き来する主婦たち。

それから、暖かさの大波が田舎町を横切った。熱い空気の大津波。まるで誰かがパン焼き窯の戸をあけっぱなしにしたようだった。別荘と灌木の茂みと子供たちのあいだで、熱気が脈を打った。つららは落ち、こなごなに砕け、溶け始めた。ドアが勢いよくひらいた。窓が勢いよく押しあげられた。子供たちは毛織(ウール)の服をぬいだ。主婦たちは熊の仮装をぬぎすてた。雪がとけ、去年の夏の古い緑の芝生があらわになった。

ロケットの夏。そのことばが、風通しのよくなった家に住む人々の口から口へ伝わった。ロケットの夏。あたたかい砂漠の空気が、窓ガラスの霜の模様を変化させ、芸術作品を消した。スキーや橇が俄かに無用のものとなった。冷たい空から町に降りつづいた雪は、地面に触れる前に、熱い雨に変質した。

ロケットの夏。人々は、しずくの落ちるポーチから身を乗り出して、赤らんでゆく空を見守った。

ロケットは、ピンク色の炎の雲と窯の熱気を噴出しながら、発信基地に横たわっていた。寒い冬の朝、その力強い排気で夏をつくりだしながら、ロケットは立っていた。ロケットが気候を決定し、ほんの一瞬、夏がこの地上を覆った。……